

コラム

わが故郷富良野と

小林多喜二の「不在地主」

金融・労働研究ネットワーク 田中均

わが故郷 富良野

私の故郷はテレビドラマ「北の国から」の舞台となった北海道の富良野です。高校を卒業するまで富良野で育ちました。「北の国から」で一躍有名になりましたが、それまでは「田舎は富良野です」と話しても、知っている人は多くない普通の田舎町でした。まだ市になる前の富良野町の時に、内地からの手紙の「宛名住所が『不良野町』になっていた」というエピソードがあるほど富良野をどう読むのかも知られていなかったようです。

「北の国から」以降、富良野はずいぶん変化しました。たまに富良野へ行くことがあっても故郷に帰ったという気持ちになれないほどです。それでも、わがパートナーも富良野高校の同級生なので「北の国」は二人で懐かしく見ます。ドラマの展開だけではなく、画面に出てくる街並みに、あそこにはSホテルという旅館があって1階の喫茶店で、二人で「深刻な話」をしたなどの記憶が蘇ったりします。

その富良野が小林多喜二の「不在地主」の舞台だと教えてくれたのは、富良野の市長だった高松竹次さんでした。高松さんは私の祖父田中竜馬のいとこです。大学院の学生だった私が富良野に帰った時に、父に言われてご挨拶に行きました。それまで、高松さんと個人的に話したことはありません。なぜ父がご挨拶に行ってきたのか今になってわかりません。就職活動の応援をお願いしろということだったのかもしれない。研究と運動のできる世界に入ろうと思っていた私には、そういうつもりは全くなかったのですが。

だからご挨拶に行っても、私の方からは何を話していいのかわからない。竹次さんもきっと「こいつは何をしに来たのか」と思っていたのでしょう。

身内の の就職をどこそこに紹介したら、就職した後でさっそく労働組合の赤旗を振っている。いったい何を考えているのか。というようなことを話してくれました。そういわれても返事に困りました。うんともすんとも言わない私に、竹次さんは話題を転じて「お前は小林多喜二の『不在地主』の舞台がこの富良野だということを知っているか」と聞いてきました。そして「俺とお前の爺さんが戦前から何をしてきたか知っておくのもいいだろう」と富良野の小作争議のことを話してくれたのです。

小説「不在地主」の 舞台となった富良野

祖父が富良野の磯野農場の農場管理人だったことは、私も幼い時から知っていました。しかし、その磯野農場で小作争議があったこと、その小作争議が日本の農民運動や労働運動の中でどんな位置づけにあるのかは全く知りませんでした。竹次さんのこの時の話ポイントは、小作争議の発端はその時の農場管理人だった但木雄尾氏の小作農に対する過酷なやり方と、小樽在住で現地の事情に通じない不在地主磯野進氏の対応にあったこと、祖父や竹次さんたちは地主側の対応と、その理不尽さんに対決する小作側との間に入って地主側の要求を大幅に緩和させたということでした。この間の経緯については三重大学の尾西康充教授が論文「小林多喜二『不在地主』の周辺」などで紹介されています。

尾西教授の論文を読むと竹次さんや祖父が状況解決の意思を持って努力したことがうかがえます。

私は経済学を勉強していましたが、農業問題は全くやっていなかったので竹次さんの話は聞くだけ聞いて終わりました。竹次さんがそういう話をしてくれたことは記憶に残りました。東京に帰ってから「不在地主」を読み直し、関連論文を読み磯野農場の小作争議が歴史的にどんな意味があったのかを多少調べました。

この争議は小作農民の争議であると同時に、小樽で事業活動を営む資本家に対するたたかいとして、小樽の労働者の連帯・支援を受けて大きな争議となり注目されました。戦前の絶対主義的天皇制を支えた地主制度に対する小作のたたかいと、資本主義的生産の発達の中で広がっていた都市労働者のたたかいの結合としてとらえられ、多喜二が創作の題材としたのもそうした新しい時代の登場を象徴していたからです。

そういうこととは別に、磯野農場の小作争議や「不在地主」に関連する研究論文を読むと、下富良野（しもふらの）とか北大沼、ベベルイ川、鳥沼あるいは東三線北2号などといった地名が遠い幼い日の思い出をよみがえらせてくれます。私の育った家は東三線北一号で（その後錦町という町名になります）、すぐ近くをベベルイ川が流れていました。

日本国憲法を 読み書き学習の教材に

農業経済を専攻していた友人の「存命中に記録を残しておくべき」との勧めもあり、祖父に磯野農場争議の経過を書いてくれるように依頼しました。祖父の返事は「もう年をとり昔のことはよく覚えていない」ということでした。この時の手紙は私が祖父から受け取った唯一の手紙です。別の時に、祖父が話してくれたエピソードがあります。争議の期間に遅くなって町から帰宅する時、遠方から自宅の周りを注意深く見なければならなかった。自宅の周りに「蛍のように点滅する明り」があると要注意で、祖父は着ているものを脱いで頭に縛り付け、用水に身を沈めてその明りが立ち去るのを待った。激高した小作たちが祖父を待ち受けていて、点滅す

る明りは待ち伏せ集団のキセルタバコの火の点滅ということでした。

私は70年安保前後に大学に入学し、学園紛争世代で当時の多くの学生同様、すさまじい衝突に巻き込まれ襲撃を受けた経験もあります。祖父の「点滅する明り」の恐怖は自分の経験としても理解でき、祖父も似たような経験をしたのか思ったものです。高松竹次さんも祖父も戦後は保守の流れの中にいた人です。しかし、身近にいろいろなエピソードを聞いているので、彼らが何を狙っていたのか政治的潮流とは別の生きざまとして共感できることがあります。

例えば、戦前に小作だったSさんが「自分は学校に行けず読み書きができなかった。お前の爺さんに読み書きを教えてもらったのだ」と話してくれたことがあります。

Sさんは「日本国憲法」で読み書きを習ったと言う。日本国憲法を読み書きの教材にするのはかなり難しいと思います。

祖父がなぜ日本国憲法をテキストにしたのか、今となっては確かめることはできません。祖父は「日本国憲法」が発表されたとき、その新聞を壁にぶら下げて保存したそうです。それをSさんの読み書き学習に使ったのでしょう。大きな歴史変動の中で、祖父自身が新憲法の意味するところを深めたい気持ちがあったのかもしれませんが。小学校では一学年跳ばして次次学年に進級する「飛び級」をしたといい、事情で師範学校進学を断念せざるを得なかった祖父の学習への思いも伝わってきます。

祖父が亡くなったとき、葬儀はそのころ移り住んでいた旭川で行われました。葬儀の中でご近所の方たちから見た「田中さんのお爺ちゃん」の晩年の様子が語られましたが、壮年期にどんなことをしていたのか語られることはありませんでした。磯野農場の小作争議や、小作への農地解放の中で祖父がどんなことをしたのかを歴史の中で位置づけて理解する人が身近にはいなかったのです。私自身も高松竹次さんに聞いていなければ「不在地主」と祖父は結びつかないでしょう。しかし、竹次さんに祖父の話聞いてから、祖父だけではなく保守政治を支えてこられた方への思いが変わったことは確かです。輸出巨大企業のお先棒を担ぎ、ひたすらアメリカにすり寄る似非保守・似非右翼は別ですが。